



↑：各部門の参加者と問題を作成した釜石キャンパスの4年生。釜石さかなと海の検定授賞式にて（R6.1.14）

岩手大学釜石キャンパスでは、釜石市の「学生活動支援事業補助金」を活用し、学生が地域と交流・連携するイベントを実施しています。釜石の特色や地域資源を学生の新鮮な視点で捉え、その魅力を発信する試みは、市民からも好評を博しています。

今回は、令和5年12月17日（日）に行われた、第2回釜石さかなと海の検定の様子を報告します。加えて、釜石キャンパスで学ぶ学生にインタビュを行いましたので、併せて報告します。

（文責・釜石市共同研究員 結城）

昨年に引き続き2回目のイベントとなった「釜石さかなと海の検定」。この取り組みは、釜石市民に対し、釜石の海やそこに生息する魚の生態、沿岸の地理や歴史への関心や知識をより深めてもらうことで、釜石の海の多様性と豊かさを知ってもらうことを目的に昨年からは始まったもの。試験自体は一日で終了するが、事前準備にかなりの時間を要するようだ。

「今年の問題作成委員会は3人でした。委員会結成後、まずは市内すべての漁港19港を回って問題にできそうなネタを収集し、どのように実施するか、どういう内容構成で進めるかということ、釜石市の水産農林課や三陸ブロードネットに相談しに行きました。」

と今年度リーダーを務めた4年生の沖亮太さんは話す。「問題として出す以上は、問題文の言い回しにも注意して作成しなければならぬ。普段はそういったことを考えることも少ないので、そういったところに配慮して作成していくのが大変でした。」とのこと。受検者が考える以上の人達が関与しているイベントだ。

「まずは素案の問題を300問作成しますが、昨年出題された問題と同じ問題は出しませんが、また、“釜石さかなと海の検定”という名称を掲げている以上、釜石市の特定の地域だけ



↑：「小中学生の部」試験後のビンゴ大会。束の間ではあるが、参加者と大学生が和気あいあいとした時間を過ごしていた。

でなく、それぞれの地域にまつわる問題を作成し、均等に出题する必要があります。」

日々学生の最前線で支援する齋藤孝信特任専門職員。事前準備に時間を要する最大の理由がこの「問題の選択」のようだ。

検定は、「小中学生の部」と「一般の部」の二つに分かれており、難易度も部門に合わせて調整している。今年は小中学生の部6人、一般の部9人が参加した。午前中の小中学生の部の試験後は、お楽しみ会としてビンゴ大会を実施した。参加者はもれなく全員プレゼントをもらえるため、子どもたちにとっては一足早いクリスマスプレゼントになったのではないだろうか。

## 第2回 釜石さかなと海の検定



↑：「一般の部」表彰式の様子。最高点の参加者の正答率は95%超え。堂々の1位受賞だった。

初参加の小学2年生の男の子は「さかなのクッションがもらえて嬉しい」とにんまり。

昨年参加した小学6年生の男の子に感想を聞くと「漁港の名前を問われる問題があつて、昨年より難しいと思った。お父さんが持っているさかな図鑑を読んだり、さかなの漢字を勉強して試験対策をしていた。」とのこと。昨年より難しかった、と悔しい表情が見られたが、堂々の上位入賞だった。

かくいう私も当日一般参加枠として受験した。釜石出身でもなく、普段釣りをすることもないため、どういった問題が出題されるのか見当もつかなかった。やはりともいふべきか、試験用紙を開いて問題文を読み進めると、知らない魚の名前や釣具の名前など、わからないものばかりだった。

それでも、問題を解きながら「そんな魚がいたんだ！」「刺身になったらこうなるのか！」と、知らないことを知る喜びを感じて非常に勉強になった。

事実、問題作成に携わった沖さんも「問題に正解した、不正解だった、という感想だけではないようにしました。今回、アカモクの名称を問う問題をつくったのですが、「アカモクとは何でしょうか？」といった文言ではなく、「アカモクはこれまで未利用の海藻だったけれど、市内漁協女性部が商品化したスーパードでもある」といった旨の文言を入れ込むことで、受験者の学びにつながるよう工夫しました」と話している。本検定の目的である「知識を深めて海の多様性や豊かさを知れる」ような工夫が随所に散りばめられていた。

年が明けた令和6年1月14日(日)には、同キャンペーンにて表彰式が実施され、各部門の上位入賞者4名が参加した。今回の最高得点者は、小中学生の部は50問中30問(正答率70%)、一般の部は70問中67問(正答率95.7%)とのこと。上位入賞者には、イベント企画のリーダーである沖さんから表彰状と豪華賞品が贈られた。

なお今回のイベントには、沖さんのほか、

4年生の山口洋平さん、三谷守さん、3年生の藤原大鼓さん、高山琢磨さんも参画した。藤原さんは「小中学生の部の採点を行いました。採点の際に問題を初めて見ましたが自分より魚に関する知識があると感じました。将来が楽しみです。」とのこと。同じく3年生の高山さんは「検定が厳粛な雰囲気だったが、そういった雰囲気を保つためにも、検定参加者の幅を拡げて岩手さかな検定にするのもアイデアだと思っています。」と話してくれた。釜石だけでなく、岩手、三陸に特化した検定になっていくのか。今後の動向に注目したい。



↑：上位入賞者には、地元企業商品のホタテや海宝漬が贈られた。

# ★本検定で出題された問題の一部を紹介します★

(1) タコの足の数は8本ですが、イカの足は何本あるでしょうか。

- ①8本 ②9本 ③10本 ④11本



【答え】①

腕ともいわれる足の数が8本、触腕が2本ある。触腕は、獲物を捕まえる際に役立つもの。沖さん曰く「ひっかけ問題として出題しました」とのこと。今回の検定でも正答者はわずかだったそう。

(2) タコの心臓は何個あるでしょうか。

- ①1個 ②2個 ③3個 ④4個



【答え】③

3つの心臓のうち、1つは体内に血液を取り込み、残りの2つでエラや筋肉に酸素を送っている。ちなみに脳みそは9つあるそうだ。

(3) 「鰯」で表される魚は何でしょうか。

- ①カンパチ ②ベラ ③カサゴ ④シイラ



【答え】④

世界の温暖な海に生息する魚。近年の海洋温暖化で、分布域が広がっており、津軽海峡などでも水揚げされるのだとか。ちなみにハワイでは「マヒマヒ」という名称で通じる高級魚で、日本でもマヒマヒで通じるとのこと。

# 釜石キャンパス学生インタビュー



↑：4年生の沖亮太さん。今年の「釜石さかなと海の検定」のリーダーを務めました。

## ●研究テーマは何ですか？

沖.. 「サクラマスの魚肉と卵巣に含まれている脂質成分が、時期によってどのように変動するのか研究していました。昨年8月〜10月にかけてサクラマスのサンプリング調査を行い、11月以降は上田キャンパスに在籍する先生のもとへ定期的に通って研究を進めていました。

## ●釜石キャンパスでの学生生活はどのように過ごしていましたか。

沖.. 3年後期はほとんど授業がありませんでした。12月からゼミが始まり、先輩たちが研究している姿を間近で見ま

した。この時期は毎晩釣りに行って、自分が好きなことをやれる最高の時間でした。ゼミのほかには海洋実習もあったのですが、上田キャンパスの学生と4回ほど行いました。

## ●釜石キャンパスではどのような学びがありましたか。

沖.. 釜石キャンパスでの生活は、上田キャンパスの時と比べ、学生の人数が少ない点で大きく異なります。少人数での活動や生活がメインになるため、仲間との友情が深まりました。今回のさかな検定のように、学生が主体となって行う活動を通じて、仲間と協力しあうことの大切さや、自発的に物事に取り組む力が身につきました。

## ●この学びを今後の社会人生にどのように活かしていきたいですか。

沖.. 釜石キャンパスでの学びは、今後の社会人生活において、組織として働くなかで活かせると考えています。具体的には、同僚や先輩と協力し合うこと、仕事に対して集中的に取り組むことができると考えて

います。

沖さん、ありがとうございます！

来年度以降も、釜石キャンパス学生の地域活動をとりにあげてまいります。

## 【MEMO】釜石キャンパスとは…？

☞岩手大学農学部食料生産環境学科水産システム学コースに所属する学生のうち、3年生後期からの研究拠点となるキャンパス。平成30（2018）年10月に第1期の学生を迎え入れ、令和6年で7年目を迎える。

※岩手大学は釜石市と連携し、釜石ふるさと寄附金（ふるさと納税）の用途として「釜石市と岩手大学釜石キャンパスとの連携推進のため」の項目を設けています。岩手大学と釜石市とのふるさと納税の連携については、右記QRコードからアクセスできます。

